

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第10章



地獄と歴史は、かつて強大なバビロンを苦しめた罪のように、今や深く絡み合っていた。1331年、中国中央部の人里離れた寺院が爆発し、その最も厳重に守られた秘密の場所から、死んだ鳥がルシファエルのメッセージを各地に運んだ。

17年間、腐敗臭が神聖にして悪性の瘴気のようにモンゴル王国を覆い尽くした黒死病は悪魔の病であった。大陸の中心部から放射状に広がるルシファエルの致命的な調合薬は、広大なアジアの王国を蝕み続け、1347年までに、死と病の波は最南端の黒海沿岸にまで達した。

そして、その近郊には、ジェノヴァの港湾都市として発展途上のカフファがある。

黒海 - カフファ - 1347年10月

ジェノヴァ人が極東とクリミア半島への水路による交易路を発見した後、アジアの港町カフファは、モンゴルのシルクロードから希少で貴重な品々を集め、ヨーロッパ各地の王国へ出荷するジェノヴァ商人にとって繁栄する玄関口へと発展した。しかし、1347年の後半、シルクロードは、熱心なジェノヴァ商人たちに全く異なる贈り物をもたらした。それは、腺ペストであった。

城壁都市カッファは直ちに城門を閉ざし、さらなる感染拡大を防いだ。一方、他の地域ではモンゴル人が何千人もの規模で容赦なく死に絶えていた。ジェノヴァの商人たちの悪評は、病気と同じくらい急速に広まった。西方の異邦人が「邪悪なキリスト教の魔術」を用いて、あらゆる呪いの母をかけたという噂である。

モンゴル上空に。そのため、生き残った軍閥は団結してモンゴル・タタール人の軍隊を組織し、植民地の獣を来た海へと追い返そうと要塞都市に突撃した。しかし、有能な弩兵、槍兵の防御陣と優れた戦略により、カッファはクリミア半島の領土を守り抜いた。

かつては静かだった田園地帯はゆっくりと変化していった。秋の落ち葉の爽やかな香りと鳥のさえずりが途切れることのない森を漂っていた場所に、今では空気は音と激化する紛争の匂い 凍った地面を轟く蹄の音 革、汗、廃棄物、そして長引く腐敗臭 遠くから聞こえる叫び声と獣の咆哮。当初は散発的だった都市への攻撃は、戦役が進むにつれて組織化され、激しさを増していった。それでもジェノヴァ人は3ヶ月間、モンゴル軍を食い止めた 復讐心に燃え、突撃し、叫び声を上げ、そして最も名誉あるモンゴル軍が波のように押し寄せ、カッファの城壁を侵食するまで。1347年の春、気候が暖かくなり、桜が咲き始めた頃

花々が咲き乱れ、ジェノヴァの血は城壁からしみ出た。食料も人手も尽きかけた孤立した住民たちは、外見上は避けられない結末、すなわちタタール人が都市を占領しようとしているという現実を受け入れざるを得なかった。

しかし、戦況は一変した。タタール軍は、異例とも言える、おそらくは神の思し召しとも言える運命の転換に見舞われたのだ。風向きが変わり、ルシファエルの熱い息が迫りくる軍勢に吹きつけ、疫病がついにタタール軍の陣営に蔓延した。わずか数日のうちに、辺り一帯は腐敗したモンゴル兵の山積みの腐敗臭で充満し、四方八方、腐敗した人肉の悪臭が空気を汚染した。屈辱に打ちひしがれたタタールの領主たちは、自らの膨大な兵力が崩壊していく様を目の当たりにした。軍団全体が、膨れ上がり、黒ずみ、疫病によって壊滅的な打撃を受けたのだ。

タタール人が新たに弱体化した状況に打ちひしがれ、恥じ入ったのも無理はなかった。彼らは文化や宗教を何よりも重んじ、命を失うことへの恐れよりも大きな名誉をもって敬っていたのだ。何世紀にもわたる揺るぎない教化によって強化された、こうした厳格な社会観念にほとんど盲目になっていたモンゴルの戦士たちは、ただ一つの生き方しか認めず、ただ一つの死に方しか受け入れなかった。モンゴル人にとって、生と死は白黒はつきりしており、尊厳と不名誉に関する事柄に混乱はなかった。彼らにとって、戦死は名誉あるものであったが、病死は家族全体に恥辱を与え、彼らの名誉を永遠に汚すものであった。

血統が不純であるという社会的烙印を背負った生存者たち。

多くのモンゴル人が熱病にかかり、最も名誉ある行動を示すために苦しめられた死を覚悟した彼らは、大規模な自爆攻撃でカッフアの城壁に突撃した。戦う力を失った落伍者たちは、よるめきながら城壁の前に立ち、まるで儀式の哀れな者や尊厳を求める乞食のように、苦しみを鎮め、そうでなければ避けられない不名誉な運命から家族を救い出してくれるような、慈悲深いジェノヴァのクロスボウを待ち望んでいた。おそらく、暗黙の救済という名目で、タタール戦士たちは都市の要塞の基部に身を投げ出し、圧倒的な数の犠牲を、ハエがたかる肉の階段のように増え続けるものに捧げ、モンゴルの仲間たちが彼らの最も立派な遺体をよじ登り、城壁を登れるようにしたのだろう。

日が経つにつれ、太陽が夕闇に沈み、海岸のそよ風が海へと向きを変えると、ジェノヴァの植民者たちは、千もの動物の刺激臭に溺れていった。タタール人の士気は低下していた。それでも彼らは都市を守り、疫病が最終的にモンゴル軍の意志を奪うことを祈っていた。兵力や要塞の規模はさておき、時間もどちらの軍にも味方ではなかった。ジェノヴァ軍は、疫病が新たに徴兵されたタタール人戦士を次々と死に至らしめるのと同じ速さで食料を消費していたからだ。そのため、両軍は完全に膠着状態に陥ったように見えたかもしれない。

しかし、歴史が如実に示しているように、戦争術が用いられるたびに、人間は単なる使い捨ての駒に過ぎなかった。そもそも、戦争術は地上の産物ではなく、厳密には神の発明であり、地獄が建設される以前、天界の天使たちが地上の兄弟姉妹、すなわち十人隊長を率いる監視者たちに対抗するために武装した時に構想されたものだった。そして、特に一人の天使は、戦争の計画を知っていた。天使アポロと同様に、ルシファエルもまた神の最も優れた、そして寵愛を受けた天使の一人であり、戦争術や征服術を含む、神の壮大な計画のほとんどを知っていたのである。しかし、アポロンの優雅な失墜とは異なり、ルシファエルは失墜直後、創造と破壊に関する鋭い知識を駆使して人間に影響を与え、同胞に対するより効果的な戦争を仕掛けるための新たな道具と戦略を与えた。大砲、長弓、そして鎧を貫通する矢は、彼女の邪悪な助言のささやきによって考案された最新の破壊兵器に過ぎなかった。今、彼女は新たな秘密をささやき、再び戦争術はルシファエルの恐るべき新概念を取り入れるべく進化を遂げた。彼女が死にゆくタタール領主たちの耳介に邪悪なささやきを植え付けたとき、彼らは

彼女の極めて卑劣な人類絶滅戦略、すなわち細菌兵器について。

ジェノヴァ人を追放することを決意し、ルシファエルの新たな啓示を受けて、領主たちは

13基の最大級のカタパルトからなる艦隊を招集し、軍隊に投擲するよう命じた。汚染された死体を、倒れた仲間の遺体とともに、囲まれた都市の中心部へと運び込んだ。カッファの城壁の上に均等に散らばった死の機械は、休むことなく動き続けた。昼夜を問わず、絶え間なく、疫病に苦しむモンゴル人の死体がジェノヴァの都市に降り注ぎ、屋根を突き破り、無防備な通行人を押しつぶした。このような恐ろしい速さで死体が運び込まれると、入植者たちはタタール人が城壁越しに投げ込む死体を焼却する速度に追いつけなかった。そして、焼ける髪や皮膚の恐ろしい臭いが、腐敗した肉の臭いと混じり合い、囲まれた集落は息苦しい悪臭で満たされた。地獄がカッファを襲った。桜の木の最も高い枝の上で、一羽のカラスが二度鳴き、そしてまた鳴いた。

包囲され、食料もほぼ尽きたカッファは、13隻の大型外洋船からなる艦隊を準備し、迅速な出航に備えて艤装を行った。ジェノヴァの船員、兵士、商人たちは、街からあらゆる財宝を略奪し、船倉を金銀、アジアの翡翠や精巧な陶器、なめし革や毛皮、原石や希少な宝石、香辛料や香水の樽など、かけがえのない品々で満たした。

そして艦隊の船体に荷物を満載し終えると、彼らは街の木造建築物から板材を剥ぎ取り、残りの積荷を収容するために船の甲板をさらに高い壁で囲んだ。街から最も貴重な財産が奪われると、12隻の船が闇夜に紛れて港からこっそりと姿を消した。

第13連隊の残りは後方に残った。彼らは街を徹底的に焼き払い、退却する艦隊に追いつくと、燃え盛る建物の轟音とともに地獄絵図を残していった。

サンタ・ゴデベルタ号は、13隻のコグ船の中で最大かつ最も航海性能に優れた船だった。巨大な円柱状の横梁が、二重に補強された板張りの船体を支え、そびえ立つマスト、ヤード、帆を備え、重厚な船団を率いてジェノヴァへと向かった。乗組員はその後、カッファの建物から借りてきた板材を用いて甲板を改造し、舷側上部に高い壁を形成した。荒波に備え、金属製の留め金でロープの網を固定し、船上に積まれた大量の貨物をしっかりと留めていた。

ほとんどの外洋航行商船よりも大型のこの船は、最新鋭の建造物であり、ジェノヴァの造船職人たちの誇りであった。U字型の後甲板が、貨物で覆われた船尾の上にそびえ立っていた。

甲板の上には、まっすぐな船首の上に広がるゆったりとした船首甲板があった。数十トンものカッファの積荷を積んでいなくても、船は144トン近くの水を押し流した。まさに海の怪物と言える船だった。

しかし、彼女は空っぽではなく、満載で、船底は水に重く沈み、12個の櫂穴は海のうねりに張り付いていた。カッファからジェノヴァへの航海はまだ8回目だったが、これから彼女にとって最も過酷なものとなるだろう。

設計上の積載量では、ほんの些細な不運や計算ミスでも、彼女と24人の船員を海の底へと沈めてしまうことは明らかだった。早朝の星空の下、穏やかな海風を受けながら、サンタ・ゴデベルタ号は重荷を積んだ艦隊を率いて、黒海の静かな海面を横切り、故郷の暗い水平線へと向かっていった。

十数隻の重荷を積んだ貿易船が喫水線を低くして重々しく航行し、過度の負荷がかかった船体木材は荒れ狂う波しぶきの中で軋み、うなり声を上げ、宝物でいっぱい船体には塩水と腐敗の臭いが漂っていた。男、女、子供が船の隅々まで覆い尽くしていた。

彼らの甲板には人がいたが、誰も言葉を発しなかった。船に乗っていた数少ない赤ん坊は弱すぎて泣くこともできなかった。

実際、ジェノヴァの植民者たちは、空飛ぶタートル人の死体からすべての財宝を携えて逃げ出し、嫉妬深いアジアの敵には焦土だけを残した。しかし、彼らの脱出がどれほど簡単で容易なものに見えたとしても、天使の介入を考慮していなかった。ルシファエルが歴史に参与すると、彼女は歴史の根を蒔き、しばしばほろ苦い後知恵で未来を縫い合わせるのだ。ジェノヴァ人はカッファから安全に逃げ出した。

しかし彼らは、ルシファエルが巧妙に仕組んだ悲惨な運命から逃れることはできなかった。航海開始からわずか数日後、艦隊の乗組員が次々と重病に倒れた。生き残った船員たちは、亡くなった船員を海に投げ捨て、病状が悪化する船員たちを船尾甲板の下に隔離した。

そして船の後部付近に。彼らは致命的な伝染病を食い止めるのに十分な時間を稼ぎ、感染者の排出された排泄物や体液を洗い流すために、バケツで塩水を甲板に撒き散らした。こうした予防策を適切に講じたにもかかわらず、彼らは仲間よりも船の甲板の下に隠れている密航者の方が感染源になりやすいことに気づいていなかった。そして艦隊が

イタリア最南端では、死にゆく者の数が生存者のほぼ2倍だった。航海の途中で、カッファを焼き払った船員たちの後続船は艦隊から離れ、平坦な海の水平線に消えていくにつれて、あてもなく漂っていた。12隻の船は、しつこく漂う棺桶のように進み、荒涼とした海を渡り、

ジェノヴァの港を見たいという願いがあった。しかし、絶望が最終的にサンタ・ゴデベルタ号を海へと向かわせた。船員たちは帆装をこなすのに苦労し、ジェノヴァはまだ航海するには遠すぎたため、船首と艦隊をシチリア島の最寄りの港、メッシーナへと向けた。

わずか十数隻のゆっくりと進む貿易船に、逃げ惑う住民と数人の瀕死の船員が乗っていただけで、黒死病艦隊は歴史を生き延び、ヨーロッパの海を航行した中で最も装備の不十分な艦隊として記憶されることになるだろう。そして、その下の海からは

「地球だ」とルシファエルは嘲笑った。

マウンテンマウス

沈む夕日はどんよりとした晩秋の雲の向こうに消え、フランスの中心部には黒く季節外れの寒さの夜が長く残っていた。木の枝が折れ、犬が吠えたが、それ以外に静まり返った風のない夜を乱す音はなかった。地下では、少年の苦しそうな呼吸音が暗闇に響き渡っていた。山の口の奥深くで、ロープをまとった人影が急な通路を登り、洞窟へと向かっていた。肩には水を入れた水袋がかけられていた。人影は水袋を洞窟の壁際に落とし、弱まりつつある火に急に目を向けた。新しい薪と新しい炎がラザロの姿を現した。フードはロープのベルトに挟まれていた。長い黒髪が少年の汚れた陰鬱な顔を縁取り、彼の目は火の光の中で輝くサファイアのように揺らめいていた。彼の吐息から立ち上る絶え間ない霧を除けば、その静止した瞬間を際立たせていたのは、燃え盛る炎の光の中で膨らんだり縮んだりする瞳孔の動きだけだった。

ラザロは石の上に座った。長い間彼の手足に染み付いていた絶え間ない寒さを払拭しようと、彼はロープのフードを頭にかぶり、燃え盛る炭に足を乗せ、新しい輝きで手を温めた。しかし、炎は上昇し、炎が轟音を立て、ラザロの瞳孔は青い円の中に針穴のように小さく見えた。彼は洞窟の冷気を完全に消し去った地獄のような熱から一歩下がった。頭上高く、オレンジ色の色合いと揺らめく影が、何千匹ものコウモリの塊にまとわりつき、踊っていた。それらの無数の目は、炎の光に反射して、星が瞬く暗い夜空。煙が螺旋状に上昇し、洞窟の天井に溜まっていく。数匹のコウモリが飛び立ち、洞窟の周りを旋回した。ラザルスはフードを頭から外し、自分の息の白さを確認したが、それはすでに消えていた。急速に暖くなる洞窟の中で、さらに多くのコウモリが動き出した。

少年は火から離れるとコウモリに目を凝らし、段々になった岩棚の不規則な列を登り、洞窟の上部へと向かった。時折振り返ってさらに高い場所からコウモリを観察してから、登り続けた。無数の黒い丸い目が彼の着実な上昇をじっと見つめていたが、少年が最初に予想したようにコウモリは逃げなかった。それどころか、コウモリたちは天井にしっかりと張り付き、ラザロがコウモリたちに興味を持っているのと同じくらい、ラザロにも興味を持っているようだった。少年は一番高い岩棚の上に登った。立ち上がってロープを整えながら、無数の目がじっと見つめている洞窟の天井を観察した。

「暖かいかい？」少年は声に出して尋ねた。「教えてくれないか？」少年の突然の呼びかけが洞窟に響き渡り、数匹のコウモリがねぐらから飛び立ち、すでに洞窟の周りを旋回していたコウモリたちに加わった。さらに多くのコウモリがそれに続き、洞窟は羽ばたく無数の音でざわめいた。

総じて見ると、彼らは順番にコロニーに対して自らの能力を証明し、大衆は天上の審判者として、最新の飛行能力を評価するためにじっと見守っていたかのようだった。そして、たとえ彼らが審査の対象ではなかったとしても、ラザルスは飛行を選んだ者たちを確かに注意深く見守っていた。

やがて少年は服を脱いだ。腰布と足用ミトン以外は何も身につけず、岩棚にしっかりと腰掛けた。彼自身の見事なコウモリのような翼を広げ、小さな先生たちの翼の動きを真似てみせた。コウモリはそれぞれ違っていたが、ラザロは飛行中の翼の動きが他のコウモリと全く同じであることに気づいた。上昇時には翼をすばめて羽ばたかせ、急に速度を落とすと翼を硬く広げ、急降下時には翼をたたむ。彼の目はきらめき、翼は空気を切り裂き、コウモリの飛行術に見られる様々な形や必要な方法を熟考するうちに、彼の頭は燃え上がった。こうして、彼はその夜のほとんどを洞窟の仲間たちから学んだのである。

夜明け前の1時間、コウモリたちはすでに黒いつぶらな目を閉じ、逆さまの白昼夢の世界に身を委ねていた。ラザロは夕方の授業を終えて退室した。疲れ果て、空腹で、寒さに震え、翼も痛むラザロは、ローブを身にまとい、洞窟の床へと降りていった。彼は火をくべ、食料袋から食べ物を取り出した。そして、新たに燃え上がる炎の前に石に腰を下ろし、傍らに水筒を置いて、平たいパンと塩漬けの肉をむさぼり食った。その時、影のわずかな動きに彼の注意が奪われた。

黄色い目が光った！

「シューッ！」ラザロは食べ物を吐き出し、石から落ちて、洞窟の入り口の暗闇の中に一對の光る片目が浮かんでいるように見えたので、慌てて後ずさりした。まるで双子の月のように、洞窟の床近くに浮かぶ球体は、反射する炎の光を放ちながらラザルスの街を照らしていた。

「誰がそこにいるんだ？」ラザロは耳を後ろに倒し、瞳孔を大きく見開いて、なんとかそう尋ねた。目は瞬きもしなかった。ラザロは空気を嗅ぎ、耳を澄ませて、同じように空気を嗅ぎ分ける動物の微かな匂いと不規則な呼吸音を探り当てた。

すると、黒いイノシシが鼻を鳴らし、通路の影から姿を現した。ラザロは安堵のため息をついた。彼は立ち上がり、ローブの埃を払いながら、くすくす笑った。「なんと、

「お前は豚だ！お前みたいな奴は本でしか見たことがない！」驚いたイノシシは洞窟の入り口に向かって逃げようとしたが、立ち止まってラザロの方を振り返った。

「ああ、行かないで！君に危害を加えるつもりはないんだ。今から座ろう。」ラザロはゆっくりと石に腰を下ろし、静かに座った。イノシシはラザロの方を向き、数歩小刻みに歩き、立ち止まって空気を嗅いだ。

「お腹が空いているのか？」ラザロは尋ねた。彼は足元から肉片を持ち上げ、明るい場所にそれを置いた。「さあ、食べなさい。」イノシシは距離を保った。

「さあ、食べなさい」ラザロは肉を動物からほんの数フィートのところに投げた。動物はラザロと食べ残しの間で不安げな視線をさまよわせ、やがて前に進み出て匂いを嗅ぎ、肉をむさぼり食った。それからラザロをじっと見つめ、まるでもっと欲しいとでも思っているかのようだった。

「君もパンは好きかい？僕はあまり好きじゃないんだ。パサパサしすぎだからね。」ラザロは大きな平たいパンを投げた。イノシシはそれをすくい上げ、洞窟から這い出した。

「待て！行くな！」ラザロは追いかけた。外の洞窟に入り、洞窟の入り口へと続く角を曲がると、岩の尾根をよじ登るイノシシが見えた。丘の上空には、夜明けとともに真っ赤な雲が広がっていた。ラザロは急に暗闇の中へと姿を消した。

その時になって初めて、彼は自分がどれほど疲れ果てていたかを悟った。彼はよろよろと洞窟へと戻った。

翌週にかけて、ラザロは練習を続け、翼に十分な力をつけ、床から体を持ち上げられるようになった。しかし、翼はまだ弱く、自分の体重を支えることができなかったため、洞窟の床にある石の間を低空で短時間飛ぶことしかできなかった。

時が経つにつれ、ラザラスはコウモリと同じ生活リズムになり、コウモリが最も活発になる時間帯に観察できるよう、昼間は眠るようになった。夜は霜が降りるたびに寒くなり、薪の山が減ると、彼は洞窟を出て山の口の裏側から薪を集めに行った。彼の焚き火から煙が立ち上るにつれ、コウモリの数は増え、邪魔されないねぐらを求めて洞窟を去っていった。コウモリのほぼ4分の1がいなくなったとき、ラザラスはかつてコウモリが覆っていた天井に空虚な場所ができていくことに気づき始めた。しかし、最近ではラザラスの注意はコウモリだけに向けられていたわけではなかった。なぜなら、授業が終わってちょうど日の出の頃、イノシシが夕食のために山の口に頻繁にやってくるようになったからである。そして、彼らは一緒に食事をした。

シチリア島 - メッシーナ港

上等な服を着たシチリアの少年が海岸線近くに立っていた。カモメの群れが彼の上を群がり、パンくずを狙っていた。彼の長い黒髪と鮮やかな服は、絶え間ないそよ風になびいていた。彼は最後のパンくずを天に向かって掲げ、苦悶の表情で目を閉じていた。カモメが彼の指からそれを奪い取ると、少年は腕を引っ張り下ろし、くすくす笑った。少年は眩しい太陽から目を守るため、額に指を組んで南西の海の水平線を見つめていた。二つの点が現れ、そして三つ目の点が現れた。

「ママ！船だ！」少年は肩越しに海の方を指さしながら叫んだ。「4隻！」
5隻！もっただ！

サンタ・ゴデベルタ号は、多数の商船を率いてメッシーナ港に入港した。低い船尾と高い船首を持つその船は、荒波を切り裂きながら進んでいった。積荷は、滅びた都市の膨大かつ高価な残骸で、船体は重荷を背負っていた。幽霊船のように、打ち捨てられた甲板は絶え間なく降り注ぐ波しぶきで光り輝いていた。それでも、航路を操る乗組員の姿は見えなかった。帆走中も、船は波に揺らぐことも、船首が下がることもなかった。何トンもの重い積荷を背負いながらも、船は水面下に深く沈んでいたが、その積荷の重さを真に物語るのは、ほんの一握りのノミと一籠のネズミだけだった。米袋ほどの重さしかないこれらの昆虫やネズミの取るに足らない積荷は、何百万もの人々の背骨を折るほどの威力があり、ヨーロッパのあらゆる王国の柱や敷石を粉碎し、大陸全体を平らにしてしまうほどの力を持っていたのだ。

大勢の歩行者や通行人が波止場に集まり、当時としては珍しい光景を目撃した。それは、どんなに広くて危険な海でも航海できそうな巨大な船団だった。何百人もの熱心な少年やみすぼらしい農民が波止場に並んでいた。

港湾当局は、ロープ杭に最も近い、まばらな埠頭スペースをより多く確保しようとしていた。彼らは貨物の荷揚げ作業員として雇われる地位を巡って争った。これほど大規模な船団では、荷揚げ作業員に選ばれた者には数日分の高額な報酬が支払われると彼らは確信していた。

労働の時が来た。男たちはぶつぶつ言い合い、互いに押し合い、レスリングをする少年たちが砂埃を巻き上げた。港は人でごった返し、混雑した群衆は通りにまであふれ出した。賑やかな街は動きを止め、近づいてくる艦隊を見守った。

傍観者たちにはますます明らかになっていたが、港湾施設はこれほど巨大な艦隊を安全に係留する能力を失っていた。それでも艦隊は前進を続け、その存在感を増しながら水平線を覆い尽くしていった。

屈強な港長と二人の港湾職人が、混雑した埠頭を見下ろす高台の木材でできた棧橋の上に立っていた。苛立った港長は近づいてくる船に向かって赤い旗を振り、船を離して停泊するように合図した。「その通りです、船長。あれらは我々の船ではありません。おそらくポルトガル船でしょう」と、港湾職人の一人が海の方を目を細めて言った。

もう一人のポーターが船長の毛深い肩を軽く叩いた。「到着しました、船長。」男は旗を下ろし、肩越しに下を覗き込むと、武装した兵士の隊列が群衆に紛れ込んでるのが見えた。彼らのヘルメットに反射する眩しい太陽の光と、細長い隊列の前進は、まるで光り輝く火の虫が波のようにならぬながら棧橋に向かって進み、人々の頭の海をかき分けていくかのようだった。彼はうなずき、再び頑強な艦隊に目を向け、必死に旗を振って呼びかけようとしたが、サンタ・ゴデベルタ号がメッシーナ港の外縁を突破したため、それも無駄だった。

船長の懸念は港の鍛冶屋たちにも明らかで、彼らも同様に

艦隊に畏敬の念を抱く。艦隊は今や、まるで激しく力強く航行しているかのように迫ってきている。外洋。大型船の安全な接岸のための慣習と規則として、これらの船は、帆をヤードに固定し、櫂を引いて港内を航行することになっていた。しかし、サンタ・ゴデベルタ号の帆は半分しかヤードに固定されておらず、残りは広げられたまま風を受けていた。メインリギングの絡まったロープがマストとヤードにぶら下がっていた。3本の櫂が弱々しく回転しているだけで、船の速度を抑えることはほとんどできなかった。

「船長、奴らがすぐ後ろに迫っています！」と港湾労働者の一人が叫んだ。「奴らの後ろには長い海が広がっています！」彼はサンタ・ゴデベルタ号のすぐ後ろをついてくる、帆をいっぱい張って櫂を使わない船を指差した。「そして次の船は、まるで板の上を転がる樽のようです。帆をいっぱい張っています。船長、見てください、樽のように大きく帆を広げて進んでいます。」

開いてますよ！私が電話しましょうか？

艦長は片手で口を覆い、旗を振りながら、湾に集まり始めた接近する艦隊に向かって叫んだ。「おいおい！ヤードの索具を組み立てろ！船首から船尾まで振り回せ！向きを変えろ」

船のうちの1隻が小型漁船を押しつぶし、船首に絡まった網で残骸の一部を引きずり回した。船長は旗を下ろし、港の鍛冶屋たちに召集の作業を進めるよう命じた。

彼らは彼の命令にすぐさま従った。そのうちの一人が振り返り、吊り下げられていた金属製の木槌をつかみ、大きな筒状の鐘を鳴らした。もう一人の男は耳をつんざくような鐘の音に負けないように叫び、腕を振り回しながら群衆に埠頭から立ち去るよう命じた。港の端から逃げようと慌てて群衆が互いを踏みつけ合い、パニックが起こった。叫び声を上げる兵士たちは必死にバリケードを作ろうと散開した。

メシーナの群衆の多くの目は、サンタ・ゴデベルタ号が白波を切り裂き、巨大な船首の下から絶え間なく海水を噴き出す様子に釘付けになっていた。まるで座礁しようとする狂乱の海の怪物のようだった。過積載の船の重みで埠頭の板や杭が次々と爆発する中、港長と二人の部下は監視塔から飛び降りた。港全体が船の衝突の衝撃で揺れた。船が座礁し、兵士たちの列の上に船体が乗り上げ、海岸線に押しつぶすと、壊れた監視塔は群衆の上に崩れ落ちた。サンタ・ゴデベルタ号が兵士たちの上に乗るとすぐに、

2隻目の船が猛スピードで港に突入し、船尾をかすめるようにして右舷側の船尾角をかすめ、急旋回して左舷側を港に叩きつけ、木造埠頭の大部分を粉々に砕いた。再び港の鐘が鳴り響き、衝突音と呆然とした住民の悲鳴に轟いた。さらに10隻の重船が

船が次々と港に押し寄せ、木材、ロープ、帆でできた巨大な壁が湾を飲み込むかのようにそびえ立ち、マスト、ヤード、甲板には乗組員の姿はどこにも見当たらず、メシーナの港はまるで幽霊船の大艦隊に包囲されているかのようなだった。

そして、まるで神の介入でもない限り、港の埠頭の大部分が破壊され、破片の山となって海岸線に押し付けられているにもかかわらず、2隻の船体は無傷のままだった。そのすぐ後ろに、さらに10隻の船が湾にゆっくりと入ってきて、やがて静止した。招かれざる船の群れに、男たちは狂った虫のように公然と走り回り、港は混沌としていた。サンタ・ゴデベルタ号の船首が陸地に囲まれたため、港長と護衛たちは船首甲板によじ登った。

シャツを着ておらず、汗だくで病弱そうな男が船倉からよろめき出てきた。彼は近くの壁に背中をもたせかけ、甲板に滑り落ちた。彼は酔っ払いのように頭を揺らしながら、だらりと身をかがめた。船員。彼の目のくぼみは暗く、まるで痣のようだった。指先も同様だった。港湾警備兵が彼を取り囲み、他の者たちは船倉へと押し寄せた。

港長は頭上を指さした。「帆を切れ！この船はここに留まるんだ！」数人の港務員が索具に登った。彼は汗だくの男に近づき、叫んだ。「この船の船長はどこだ？」彼は船倉の入り口の方を向き、大声で叫んだ。「乗組員全員を甲板に上げろ！連れてこい！」彼は汚れた男の方を振り返った。「この艦隊の指揮官は誰だ？」

男は熱で錯乱した様子で、「船長も艦隊もない。あるのは海だけだ。海は死者を、すべての死者を連れ去る」と答えた。

港湾労働者が船長の耳元でささやいた。「彼は間違いなく酔っているよ。」

港長は尋問を続けた。「この船の名前は？この船団はジェノヴァ行きだろう？」彼は山積みの貨物を見回し、他の船の甲板にも目をやった。「君たちの船は積載量を超えている。どうやって沈没せずに済んだのか、神のみぞ知る。一体どこからこんなにたくさんの貨物を手に入れたんだ？」

男はなんとかこう答えた。「船はサンタ・ゴデベルタ号で、カッフアからジェノヴァ行きです。」

船長は部下二人に「彼を立たせろ。少し空気を吸わせろ」と命じた。隣に立っていたもう一人の部下には「水を汲んでこい。酔いを覚ませ」と言った。船長は首を振り、「カッフア、こんな荷物で？」とつぶやいた。彼は甲板のほぼ全域を覆う縛られた荷物を見回し、樽の間を走り回る黒いネズミを見つけた。

腕を組んで言った。「千年経ってもありえない。」

「船長！」船倉の中から声が聞こえた。「ここにいるのはたった5人だけです。船倉はひどく満員です。」港長は船倉をじっと見つめた。

男が部屋から出てきて額の汗を拭くと、彼は続けた。「隊長、この人たちは具合が悪いです。かなり重症です。担いで運ばなければなりません。」

二人の警備兵が汚れた水兵の腕の下に手を伸ばし、彼を立たせた。

「うわっ！」男は叫び声をあげ、ぐったりと崩れ落ちた。驚いた警備兵たちは彼を甲板に放り投げ、意識を失った男は両腕を頭の上に伸ばして横たわり、脇の下から腐ったリンゴのような黒く腫れ上がった塊が突き出ていた。破裂した腫れ物からは膿と黒い血が混じった液体が漏れ出し、甲板に溜まった。警備兵たちはズボンの裾で腕を拭いた。甲板から悪臭が立ち昇った。

眠っている船員。船長は鼻と口を手で覆い、後ずさりした。「神の名において！」

すると彼は振り返って大声で叫んだ。「船から降りろ！何も触るな！疫病が船内に蔓延している！」
港湾鍛冶屋たちが索具を駆け下り、中には頭から水中に飛び込む者もいたため、警備兵たちは船首に向かって飛び込んだ。

その後間もなく、12隻の船はすべて港に係留され、数百人の武装兵士によって警備された。兵士たちは、船に乗り降りしようとする者を、たとえ致命的な武力を用いても阻止するよう命令を受けていた。そしてわずか1日のうちに、汚染された船についての噂はメッシーナ中に広まった。

2日目、艦隊の乗組員は医師を乗船させて病人の手当てをするよう要請した。市当局は、医師が一度乗船したら船に留まることを条件にのみ同意した。しかし、市内の医師は誰も同意しなかった。港湾当局は、ロープで吊るしたバケツで食料と水を船に送った。バケツは空になると船上に残された。このようにして、船を隔離するためのあらゆる予防措置が講じられた。

3日目、死臭が波止場に漂い、海風に乗って内陸へと運ばれてきた。

医師たちの警告により、風が船の伝染病を運ぶ恐れがあるとして、警備員たちは後退するよう命じられた。警備員たちが船から遠ざかると、夕暮れが静かに埠頭に降り、喉の渴きに駆られたネズミたちは勇気を振り絞って船の係留索やロープを伝って埠頭に這い上がり、そして慌てて逃げ去り、埠頭のネズミの仲間たちの元へと戻っていった。

6日目、多くの警備兵が病に倒れた。怒った群衆が港に集まり、市当局は、船が放火されるのを恐れて、12隻の船を貨物ごと港から出すよう命じる以外に手段がなかった。ジェノヴァ、マルセイユ、コルシカ、サルデーニャから駐留していた船員たちは、すぐに利益が得られ、他のヨーロッパの港への航行も自由になると考え、船を港から出して沿岸の様々な都市へ向かわせる見返りに、艦隊の貴重な貨物を分け合うことに同意した。

そして7日目、港は船を海へと押し流した。すぐに、黒海は死の艦隊は解散し、そのほとんどの船はジェノヴァ以外の港を目指して出航した。かつて混雑していた甲板はがらんとしていた。乗客と乗組員は、疫病に感染した人々を一人ずつ海に投げ捨て、航海を生き延びた者は一人もいなかったのだ。

表面的には目立たないメッシーナだったが、すでに運命は決まっていた。港からジェノヴァ船は一掃されたものの、ゲートストーン疫病はドックの下の影に潜んでいたのだ。感染した埠頭のネズミの背中には、同じく感染したノミが寄生し、病原体を宿していた。ノミの胃は地獄の小さな子宮であり、出産寸前で、悪魔の秘薬を産み落とそうとしていた。そして悪魔の邪悪さは進化を遂げた。数週間のうちに、ラザロの邪悪な母はメッシーナの住民全員を、死と病原菌に侵された黒リンゴが実る果樹園に変えてしまった。

彼女の摘み取り。

こうして、大疫病は港湾地区から発生し、内陸部へと猛威を振るい、後には都市の残骸だけが残された。ヨーロッパの終末が訪れる中、疫病は猛烈な勢いで燃え上がり、まさに大火災となった。

マウンテンマウス

ラザルスがマウンテンマウスに到着してから3週間以上が経過していた。その間に、彼の体は筋肉が隆起し、腕や脚の体重は減ったものの、その分、より重くなった筋肉質の翼に力が移った。床の石の間を短距離飛行していたのが、より高高度での長距離飛行へと進化していた。屋根近くの石棚まで壁を登る必要はなくなり、直接そこへ飛んでいくようになった。薪集めも、マウンテンマウスの裏側を歩くのではなく、山頂を越えて戻ってくるようになった。しかし、こうした新たな能力を身につけたとはいえ、イタリアの修道院まで旅をする体力はまだなかった。薪集めのような、少しでも労力を要する短い飛行でさえ、息切れしてしまうのだ。そして、レオン湾を渡ってコルシカ島へ、あるいはコルシカ島からイタリア本土へ渡るには、少なくとも半晩は空中にとどまることができることを証明しなければならないことを、彼は理解していた。

北から容赦なく冷たい風が吹きつけていた。石の谷は、前夜の雷雨でできた薄い氷の層で覆われていた。洞窟の中には、ラザロが横たわっていた。

眠りについた彼は、消えゆく火のそばで丸まり、規則正しい吐息が冷たい空気に霧を立ち昇らせていた。彼にとって、天井の半分は空っぽで、コウモリは高い後方の屋根に寄り添っていた。

洞窟。

ラザロはうめき声をあげ、体を丸めてさらに縮こまった。まだ眠っていたが、耳をぴくぴくさせ、洞窟の壁に反響する新たな音を探した。彼は目を開けると、大きく見開いていた瞳孔が青地に黒い点のように縮んだ。

「豚野郎？」彼はそう叫び、ゆっくりと座り込んだ。牙をむき出しにしてあくびをし、彼は顔をこすった。「お前か？」鼻を鳴らして答えた。「今はダメだ、豚野郎。もう疲れ果てた。」ラザロは暗闇の中を探し回ったが、イノシシが食料の入った袋を漁っているのを見つけただけだった。「豚め！だめだ！」ラザロは飛び上がってイノシシに向かって走った。「出て行け！」イノシシは袋から頭を出し、口にはふつくらとしたカボチャをくわえていた。イノシシはキーキーと鳴き声をあげ、そのカボチャをくわえたまま洞窟から飛び出していった。

「そんなことはさせないでくれ」ラザロはどもりながら、必死に袋の中身を探した。血の入ったフラスコを取り出し、調べてみると、側面に細いひびが入っている以外は、容器は密封されたままで、壊れていなかった。安堵したラザロは、別の考えが頭に浮かび、袋の中をめぐってみると、イノシシが食べ物を全て奪い去っていたことに気づいた。

「豚野郎！」と彼は叫んだ。ラザロは袋から小さな革の鞆を取り出し、その中に水筒と、自分のそばに置いておくべき重要だと考えた他の品々を入れた。

それから彼は財布を持って、消えかかっている火のところへ怒鳴り戻った。「なぜだ？」彼は財布を傍らに置き、新しい薪をくべて火を焚いた。「お前と食べ物を分け合ったのに！」彼は燃え盛る残り火の上にさらに薪を投げ入れ、洞窟の入り口に向かって叫んだ。彼の声は遠くまで届いた。

霧の中の鐘のように窪みを抜けて「盗んではならない！」という声が響いた。くすぶっていた丸太が炎に包まれると、数匹のコウモリが飛び立ち、洞窟の周りを旋回した。ラザロは炎を睨みつけた。

新たな雪が降り積もり、山口は雪に覆われ、また一週間が過ぎた。その間、ラザロはローブの背中を切り裂き、翼をローブの外に垂らした。また、マスクも再び着用した。凍えることなく山口の頂上を長時間旋回するには、これらの変更が必要だった。そして、そのおかげで、彼は3時間近く空中にとどまることができた。しかし、3時間でも海を渡るには十分ではなかった。冬が急速に近づき、食料も尽きたラザロは、ついに飢えと疲労と厳しい寒さで倒れた。こうした耐え難い状況が彼を洞窟へと引き戻し、自らの約束を再考させることになった。

早朝、無数の星々が深紅の空に沈み、死んでいくのが見えた。

洞窟の中で、気だるげなラザロは再び火をくべ、頭を横たえた。ほとんど人影のない天井を見下ろすと、コウモリはわずか4分の1しか残っていなかった。彼はそこに横たわり、修道院へ飛び戻るべきか、夜の闇に紛れて洞窟へ戻り、食料を補充すべきかを考えていた。

彼は空気を嗅いだ。そこには見覚えのある匂いが漂っていた。彼の胃はきゅっと締め付けられた。ラザロは床をよじ登り、大きな岩を持ち上げ、翼を広げて空へと飛び立った。彼は洞窟の中を旋回し、通路の入り口に目を凝らしていた。ラザロの存在に気づかないイノシシは、静かに家の中に入り込み、ラザロの空っぽの食料袋の方へゆっくりと進んでいった。そして、その動物は開口部から頭を差し込んだ。ラザロは石を投げつけ、イノシシの頭を叩いた。イノシシは悲鳴を上げ、天井からコウモリが飛び出した。

イノシシは洞窟からよろめき出てきた。飢えに駆られたイノシシは石を持ち上げ、追いかけた。二匹は洞窟から飛び出し、石の谷を駆け抜けた。ラザロは悲鳴を上げるイノシシに追いつき、二匹は尾根の頂上を越え、東斜面をよじ登って下りていった。方向感覚を失ったイノシシは立ち止まり、牙を振り回しながらラザロに襲いかかった。その瞬間、ラザロの石が命中し、イノシシは息絶えた。

息切れして疲れ果てたラザロは、豚の後ろ足の蹄をつかんで尾根を登り、洞窟の方へ引きずっていった。頂上に近づいた時になって初めて、彼は自分の窮状に気づいた。燃えるような赤い夜明けに目を細めながら顔を上げると、太陽が昇る中、自分が洞窟の外に立っていることに気づいた。彼は必死に豚を尾根を越えて引きずり、影になった斜面を下った。何度も何度も力を込めて、ラザロは乾いた川床を豚を引きずり、雪をかき分けて洞窟へと向かった。雪は豚の上に積もり、まだ温かい動物の毛皮に溶け込んだ。時間は蜂の群れのようにあっという間に過ぎ去った。太陽はさらに昇り、星々は今やその炎に飲み込まれていた。日焼けのかゆみがむき出しの肌に広がったが、ラザロは残されたすべての力を振り絞って、痛みを無視しながら一歩ずつ、一歩ずつ進み続けた。

やがて彼は洞窟の入り口にたどり着き、イノシシをその暗い奥深くへと引きずり込んだ。灼熱の太陽の最初の光線が地平線から差し込んだ。ラザロは必死にもがき、濡れて重くなった獣をさらに暗闇の奥へと引っ張り、引きずり込んだ。足が洞窟の床の岩に引っかかり、ラザロはそれを引き抜いた。彼は立ち上がり、もう一度引っ張られるのに備えて身構えた。その時、遠く東の尾根の頂上にある遠くの裂け目から、蜘蛛の巣よりも細い赤い光の筋が差し込んだ。深紅の光の線は石の谷を横切り、洞窟の入り口に入り込んだ。

光線は洞窟に差し掛かり、イノシシの濡れた後ろ足に当たって跳ね返った。すると光線は進路を変え、イノシシの足から上へと上昇し、ついにラザロの目に直撃した。

少年はイノシシを放し、全身を影の中に投げ込んだ。彼はもがき苦しみ、

怒ったズメバチの大群から逃げようとするかのように、洞窟の床をよじ登った。「ああ神よ!ああ!ああ!」

硫黄の煙と灰色の灰が彼の体のあらゆる部分から噴き出し、埃っぽい黄色の煙が洞窟の床に大量に降り注いだ。彼は手足をばたつかせながら、盲目的によろめきながら立ち上がり、方向感覚を失った豚が洞窟からよろめき出てきたのと全く同じように、洞窟の奥深くへとよろめきながら進んだ。ラザロが通路を駆け抜け、洞窟の最も暗い奥深くへと飛び込むと、彼の後ろには黄色っぽい灰がたなびいていた。

「ああ、神様!ヒッ!」彼は崩れ落ち、間に合わせの食料袋の上に転がった。

「キーッ!」驚いたコウモリが天井から飛び出し、彼の頭上を旋回した。洞窟の床を転がり、爪で引っ掻き、袋を被せ、ありとあらゆるものを掴もうとするが、彼がどんなに力を振り絞っても、動いても、何をしても、起きてしまったことを元に戻すことはできなかった。かつて太陽に焼かれたグロテスクにとって、財布も、祈りも、約束も、展開し続ける揺るぎない出来事の流れを逆転させることはできなかった。煙を上げる姿は食料の袋を被せ、それから片腕で後ろに寄りかかり、まっすぐに座った。天井を見上げるその叫び声を上げる顔は、ますます硬く脆くなっていく顔で震え、最後の死に際のうめき声を上げた。「父さん!」色は抜け落ち、花崗岩のように灰色の硬い表面が残った。

霧が晴れていくと、死んだラザロの精巧な像が残っていた。骨さえも石化していた。像は傾いて倒れ、石化した片腕が天に向かって突き上げられ、指は呼びかけた父に手を伸ばすかのように広がっていた。そして最後の残骸が消え去ったとき

埃や黄みがかかった砂が落ち着くと、洞窟はほぼ元の汚れのない、地下墓地のような状態に戻った。ただ、時折、落ちたコウモリが羽ばたき、パチパチと音を立てて燃える焚き火の炎が舌なめずりをし、埃と灰で覆われた従者のローブのような花崗岩の石が一つだけ残っていた。

【第10章終了】



この文学作品は

d専ら献身的に

エドガー・アラン・ポー (1809年 - 1849年)

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~